

日本のホテル業に関するノート

日本におけるホテル業の特徴を考えるに当たって、外国、特に欧米のホテル業における歴史を振り返って見ることは有益である。なぜなら、日本のホテル経営は多くを欧米、特にアメリカのホテル業から学んで来たからである。

宿泊施設の必要性が生じたのは人間が移動し、旅人が快適さと安全性を求めるようになって以後のことと考えれば、宿泊施設の歴史は非常に古いものである。旅行の歴史を見てみると、交易のための旅行があり、シルクロードでは隊商の宿として中庭に集まるキャラバンサリーがあった。また、日本における参勤交代は宿場と大名の宿である本陣を生み、あるいは古代ローマではマンションと呼ばれる宿泊施設があって、役人や軍人など役所が発行する証明書をもっているものだけが宿泊できたといわれている。また、聖地への巡礼の旅には教会が宿泊施設として使われたが、やがてこの施設だけが独立して後にインと呼ばれるようになったように、様々な理由で人々が移動し、その結果として宿泊施設が生まれ、それが人々の移動を更に促進していったのである。

いざれにしても、本格的なホテルが出現する以前のこの時代の特徴は人々は必要やむを得ず旅をしたのであり、宿泊施設は快適性の面でも安全性の面でも極めてレベルの低いものであった。旅は危険と苦労を覚悟の上で行われたのであった。

19世紀になって、王侯、貴族など特権階級を対象とした豪華ホテルが誕生した。ドイツの有名な観光地であるバーデン・バーデンはフランスの上流階級の水浴場としても知られたところであった。ここに建てられたバーディッシュ・ホーフはいわば王侯・貴族を対象としたリゾート・ホテルであり、その施設は豪華を極めた。贅沢なフランス料理、豪勢な建築や内装、豪華な家具や食器類、接客の作法や服装など現代の高級ホテルで行われている典型的なサービスのやり方はこの時代に生まれた。

本ホテル産業ノートは日本能率協会の資金援助の下に、慶應義塾大学ビジネス・スクール教授柳原一夫が作成した。作成年月1989年6月
主たる参考図書：ホテル産業界 原 勉、岡本伸之、稻垣 勉著（教育社新書）